

深田久彌●山の文学全集

日本百名山

80
ア

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

朝日新聞社

深田久彌●山の文学全集

V

日本百名山



深田久彌・山の文学全集 V

日本百名山

全十二巻・第五回配本

一八〇〇円

発行

昭和四十九年七月二十一日

著者

深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀

原 弘

発行者

岡見 璋

印刷所

明善印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shigeko Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集

V

目次

日本百名山……………九

- 利尻岳(一) 羅臼岳(三) 斜里岳(五) 阿寒岳(七) 大雪山(三〇)
- トムラウシ(三) 十勝岳(五) 幌尻岳(六) 後方羊蹄山(三〇)
- 岩木山(三二)
- 八甲田山(三三) 八幡平(三六) 岩手山(三六) 早池峰(四二) 鳥海山(四四)
- 月山(四六) 朝日岳(四九) 蔵王山(五二) 飯豊山(五三) 吾妻山(五五)
- 安達太良山(五七) 磐梯山(六〇) 会津駒ヶ岳(六三) 那須岳(六五)
- 魚沼駒ヶ岳(六七) 平ヶ岳(六九) 巻機山(七一) 燧岳(七三) 至仏山(七五)
- 谷川岳(七六)
- 雨飾山(八〇) 苗場山(八二) 妙高山(八四) 火打山(八六) 高妻山(八八)
- 男体山(九一) 奥白根山(九三) 皇海山(九五) 武尊山(九七) 赤城山(九九)

草津白根山(一〇二) 四阿山(一〇三) 浅間山(一〇四) 筑波山(一〇五) 白
馬岳(一〇六) 五竜岳(一一三) 鹿島槍岳(一二四) 剣岳(一二五) 立山(一二六)
薬師岳(一二〇)
黒部五郎岳(一三三) 黒岳(一三四) 鷲羽岳(一三六) 槍ヶ岳(一三九) 穂高
岳(一四一) 常念岳(一四三) 笠ヶ岳(一四四) 焼岳(一四七) 乗鞍岳(一五〇)
御嶽(一五二)
美ヶ原(一四四) 霧ヶ峰(一四六) 蓼科山(一四八) 八ヶ岳(一五五) 両神
山(一五九) 雲取山(一六〇) 甲武信岳(一六五) 金峰山(一六八) 瑞牆
山(一六九) 大菩薩岳(一七三)
丹沢山(一七五) 富士山(一七六) 天城山(一七八) 木曾駒ヶ岳(一七九) 空
木岳(一八三) 恵那山(一八五) 甲斐駒ヶ岳(一八七) 仙丈岳(一八八) 鳳凰
山(一九二) 北岳(一九四)
間ノ岳(一九六) 塩見岳(一九八) 悪沢岳(二〇〇) 赤石岳(二〇二) 聖
岳(二〇三) 光岳(二〇七) 白山(二〇九) 荒島岳(二一〇) 伊吹山(二二〇) 大
台ヶ原山(二二五)
大峰山(二二八) 大山(二三〇) 剣山(二三三) 石鎚山(二三四) 九重山(二三六)
祖母山(二三八) 阿蘇山(二三九) 霧島山(二四三) 開聞岳(二四四) 宮之浦

岳(三七)

後記(三六)

山によせて……………三三

信仰登山……………三七

北アルプス登山史……………三三

冒険の精神……………三五

『氷壁』論……………三六

個性的な登山……………三七

山と還暦……………三六

地図のたのしみ……………三六

女人禁制の山……………三七

“文明の侵略”を排す……………三六

山の絵……………三七

万葉登山……………三六

越中の二上山……………三六

『日本風景論』……………三七

『日本山嶽志』について

二九

富士のけむり

二九一

登山とスポーツ

二九七

山の友人たち

三〇一

『わが山旅五十年』の田部さん

三〇七

古い山友達、そして新しい話友達

三一二

アンデスの雪に消えた山川勇一郎君

三二四

山の本と映画……………三二七

本 集 め

三二九

藤椅子の上の登山

三三三

本 小 屋

三三七

山の本の話

三三九

ヒマラヤの本

三四三

山岳図書館展覧会

三四〇

この一本展

三四四

山の好きな読者のために

三四七

わたしの読書

紀行と記録——『アルプスの三つの壁』『星と嵐——六つの北壁
登行』(三三) 『マナスル登頂記』(三四) 『モゴール族探検記』(三五)
『知られざるヒマラヤ』(三六) 『チョゴリザ』『ヒマルチュリ』『ヒ
マルチュリ日記』(三七) 『ヒマラヤ——秘境に生きる人びと』(三八)
『ヒマラヤの旅』(三九) 『栄光への挑戦』(四〇) 『日本アルプス
へ』(四二) 『森林・草原・氷河』(四四)
研究と随想——『山日記 1955年版』(四五) 『ヒマラヤ——
その探検と登山の歴史』(四六) 『白山の歴史と伝説』(四七) 『印度洋
にかかる虹』(四八) 『登山の夜明け』(四九) 『白山』(五〇) 『この山
なみのこえ』(五一) 『ヒマラヤ——日本人の記録』(五二) 『日本山岳
研究』(五五)
人と文学——『白い塔』(五七) 『ヒマラヤの男』(五七) 『強力伝』
『孤島』(五八) 『エヴェレスト——その人間的記録』(五九) 『ピッケ
ルの思い出』(六〇) 『山のわかれ山の出会い』(六一) 『おきなが
さ』(六二) 『一火』(六三) 『いたるところの歌』(六五) 『アルプス
——山と人と文学』(六六) 『登山のたのしみ』(六七) 『山のがき大将

たち』(三七)

映画のはなし

三八

「エヴェレスト征服」(三八) 「マナスルに立つ」(三九) 「火山の驚

異」(三九) 「花嫁の峰チヨゴリザ」(三九) 「燃ゆる若者たち」(四〇)

「ビッグ・ホワイト・ピーク」(三九) 「山」のスペクタクル(三九)

雑 囊

三九

深田久彌・人と作品(五)

近藤 信行……四三

解題

中馬 敏隆……四三

日本百名山

1 利尻岳 (一七一九m)

礼文島から眺めた夕方の利尻岳の美しく烈しい姿を、私は忘れることが出来ない。海一つ距ててそれは立っていた。利尻富士と呼ばれる整った形よりも、むしろ鋭い岩のそそり立つ形で、それは立っていた。岩は落日で黄色に染められていた。

島全体が一つの山を形成し、しかもその高さが千七百メートルもあるような山は、日本には利尻岳以外にはない。九州の南の海にある屋久島もやはり全島が山で、二千メートルに近い標高を持っているけれど、それは八重山と呼ばれているように幾つもの峰が群立しているのであって、利尻岳のように島全体が一つの頂点に引き上げられて天に向かってはいない。こんなみごとな海上の山は利尻岳だけである。

この立派な山が、わが国山岳書の古典である志賀重昂

の『日本風景論』にも高頭式の『日本山嶽志』にも出ていないことを、私は大へん遺憾に思うが、それだけこの山の世に知られることがおそかったのかもしれない。

私の眼にした最初の利尻岳紀行は、『山岳』第一年二号に載った牧野富太郎氏のそれである。明治三十六年(一九〇三年)八月のことで、この植物学者の一行は鵜泊から登った。ほとんど道らしくもない道を辿って、山中に二泊している。頂上には木造の小さな祠があったというから、土地の人は、すでに登っていたのであろう。紀行にはカタカナの植物の名がたくさん出てくる通り、北日本で最も種類に富み、リシリという文字が頭についた名の植物だけでも、十八種に及ぶそうである。

利尻は噴火によって出来た円形の島で、中央にそびえた利尻岳が四周海ぎわまで裾を引いている。したがって人の住んでいるのは海ぎわだけで、島を一周するバスが町や村をつないでいる。おもな町は、杵形、鵜泊、鬼脇、仙法志の四つで、どこからも、利尻岳のよく見えることはもちろんである。大体富士型の山であるが、仰ぐ方面によって幾らか形が変わる。鬼脇と仙法志の中間の三日月沼あたりから見た姿が一番尖鋭で、それはまるで空を

刺すような鋭い三角錐である。

北海道本島と遮断された海上の山だけあって、ここには蛇や蟻あみがいけないという。北海道の山に付きものの熊もいない。かつて対岸の天塩てんしに山火事があった時、難を逃れてこの島まで泳ぎ渡ってきた熊が一時棲みついたが、いつの間にか見えなくなったそうである。たぶんまた古巣へ泳ぎ帰ったのであろう。

駕泊、鬼脇、杓形からそれぞれ頂上へ登山路が通じている。一番古いのは牧野富太郎氏らの登った駕泊道で、行程は長いが楽なので、今でも一番多く利用されている。反対側の鬼脇道は、距離が短く変化に富んでいるが、頂上近くで瘡かさせた岩尾根を迎える危険を冒さねばならない。

私達は杓形から登った。この道は一番新しく、道のりも長い。ややだらだらした裾野を登って森林帯を出ると、見晴らしがよくなる。眼の下の海岸に打ち寄せる白波がレースで縁取ったようにはっきり見え、その先に細長い礼文島が浮かんでいる。もうそのあたりは匍松はまつの敷きつめた高山帯で、ゴゼンタチバナの赤い実が道傍を綴つづっていた。

暴風一過後だったので大気は澄んでいたが、風は強く

絶えずゴーゴー鳴っていた。下の方は鮮やかに晴れているにもかかわらず、頂上にかかった雲がなかなか取れない。海洋の気流が頂上にぶつかって、そこで絶えず湧かせている雲だから、これはあきらめるより他はない。

出発点が海拔ゼロメートルであるから、千七百メートルを越える霧の頂上まで、ゆっくり登って八時間もかかった。じっと立っておられないくらい風が強かったが、その強い風が瞬時霧を追ひ払って、眼の前にみごとな眺めを見せてくれた。それはローソク岩と呼ばれる大岩柱で、地から生えた牙のように突っ立っていた。それが流れる霧の間に隠見するので、よけいに素晴らしいものに見えた。

帰途は鬼脇へ下る予定であったが、この強風中、岩の瘡尾根は危険だということで、駕泊道をとることにした。この下りは道はやさしいが実に長かった。駕泊の町に入った時はもう暗くなっていた。

翌日の午後、私達は利尻島を離れた。きれいに晴れた秋空であった。稚内ちのちへ向かって船が島から遠ざかるにつれて、それはもう一つの陸地ではなく、一つの山になった。海の上に大きく浮かんだ山であった。左右に伸び伸

びと稜線を引いた美しい山であった。利尻島はそのまま利尻岳であった。それもいよいよ遠くなり、稚内の陸地が近づいて来た。やがて山も消え、その山の形に白い雲がひと所海面に湧き上がっているのが、利尻岳の最後の面影であった。

2 羅 白 岳 (一六六一m)

千島を失った今日、日本の東北端は知床しとけになった。オホーツク海に向かって長く差し出したこの半島は、荒涼とした僻地に憧れる人たちにまだ夢を残している。その知床の代表として羅白岳らぱくを挙げるのは、決して不当ではあるまい。

知床半島というのは細長い山脈の突出であって、ほとんど平地がない。海のきわまで山が迫っている。その山脈のおもな峰々を半島の付け根の方から数えて行くと、海別岳うみべつ、遠音別岳とんねつ、羅白岳、硫黄山、知床岳などがあり、

羅白岳が最も高い。全体が火山脈であるが、ほとんどが死火山であって、現在活動しているのは硫黄山だけである。

知床の山々が登山の対象になりだしたのはそう古いことではない。北海道の中でもこの僻遠の山が一番あとまで取り残された。初め北大の山好きの学生たちによって登られたが、それが多くは積雪期であったのは、夏よりも冬の方が歩きよかったからであらう。というのはこの山脈は凄惨な匍松はぐまつに覆われているからである。海別岳や羅白岳以外の山へ行こうとすると、匍松との悪戦苦闘を覚悟せねばならない。

羅白岳が知床富士とも呼ばれるのは、羅白村からすぐ眼前に形のよい円峰のそびえているのが見えるからだろ。村は海ばたにあるし、そこから直線距離八キロで、掛値なしの一六六一メートルを仰ぐのだから、山は大きく立派に違いない。違いないと言うのは、私は羅白岳に登るため天気を待って村の宿屋に四晩も過ごしたが、ついに山を仰ぐことができなかったからだ。ただ写真で察しただけである。

羅白村は知床半島唯一の都会で、一本筋の通りには、

映画館やバーマネット屋やバーまであった。バーは漁期に集まってくる季節労働者のためのものらしい。村を出外れた所が港になっていて、むやみと鳥が群れていた。すぐ前の海には今はソヴェトのものとなった国後島が大きく横たわっている。

羅臼はアイヌ語で「鹿、熊などを捕ると必ずここに葬ったため、その臓腑や骨のあった場所」という意だそう
で、ラは「動物の内臓物」、ウシは「たくさんある所」を意味するという。ラウシと呼ぶのが正しく、古い地図には良牛と書かれている。

村に誠諦寺というお寺があつて、住職の西井誠諦師が羅臼岳の開発に力を入れておられる。村から登山道が開かれたのも西井さんなどの尽力であつて、それは昭和二十九年（一九五四年）のことであつた。

それまでは羅臼岳へ志す人は、半島の北岸の宇登呂から岩尾別を経て登つた。岩尾別からイワウベツ川を溯ると温泉があつて、そこが登山のよい足場になっていた。距離からいうと岩尾別の方が頂上に近いので、この方の登山道が先に開けたのであろう。

私は羅臼から登つた。村から羅臼川に沿つて一時間ほ

ど行くと、羅臼温泉がある。村営の宿が建っていたが、食糧・寝具の設備は無かつた。そこから山にかかる。針葉樹林の尾根の腹を捲いて、いったん硫黄で黄いろくなつた沢へ下り、そこから屏風岩と呼ばれる長い大岩壁の裾に沿つて急坂を登ると、ラウス平という大きな斜面に出る。

ラウス平は一面匍松の櫛で、その豊かな拡がりはおんなびりして美しい。季節にはお花畑になる。平の向こうには三ッ峰が立ち、三ッ峰からさらに北すれば、サシルイ、オッカバゲを経て、活火山の硫黄山まで近年道が開かれた。硫黄山の外輪をなす岩壁は壮絶な眺めだそうである。

羅臼岳の頂上へ私は立つたが、霧に包まれて何にも見えなかつた。ただオホーツク側から巻きあげてくるすさまじい風の音を聞くだけであつた。

だから羅臼山岳会で書かれた記事によつて、その展望を察することにした。まず東を望むと足下に国後島が浮かび、その向こうに太平洋が拡がって、遠く千島の列島が見える。南に向くと、知西別川上流の分水嶺のあたりに周囲五キロに及ぶ無名湖（羅臼湖と呼ぶ人もある）があつて、その周りに大小七つの沼が点在している。こ